

第79号

2022年3月
認定特定非営利活動法人

麦の会

TEL&FAX 022-299-1279

〒983-0834 仙台市宮城野区松岡町17-1 郵便振替口座 02200-8-46178

E-mail : muginokai@k5.dion.ne.jp <https://www.muginokai-koppe.com>

目次	ソーシャルプロダクツ賞受賞 改めて、共に働くとは 10年の軌跡と私たちの提案 漢字のかみさま④ 自己紹介 当事者の意向を尊重するとは 絆 寄付金の御礼	飯嶋 茂 … 1p 金澤 恵利香 … 2p 太齋 京子 … 3p 神品 暖子 … 5p 菅野 優実 … 6p 飯嶋 茂 … 7p 阿部 央希 … 8p … 8p
----	--	---

ソーシャルプロダクツ賞受賞

飯嶋 茂

ソーシャルプロダクツ・アワード2022において「コッペのフェアトレードクッキー」(ネグロスクッキー・コーヒークッキー・オリーブオートミールクッキー)がソーシャルプロダクツ賞を受賞しました。

ソーシャルプロダクツ・アワード(SPA)は、持続可能な社会の実現につながる優れた「ソーシャルプロダクツ」に光をあて、社会性と商品性の両面を評価する日本ではじめての表彰制度です。2012年に始まり、SPA2022で9回目を迎えました。私自身このような賞があることを知らなかったのですが、上記クッキーセットを掲載していただいている通販サイト「SoooooS」(スース)さんからお話があり、応募しました。

『ソーシャルプロダクツ・アワードでは自由テーマと年度テーマがありますが、年度テーマが「東日本大震災からの復興につながるソーシャルプロダクツ」ということで、コッペさん応募してみたいかですか』ということでした。

賞はその上に1~3位に相当する賞があり、ソーシャルプロダクツ賞はコッペも含め15の団体が受賞しています。受賞した製品を見るとどれもすてきなもののばかり。そのような製品の中の一つとして認められたことはうれしいことです。

これもひとつのはげみとしてこれからも安心して美味しいパンクッキーを作りたいと思います。

一般社団法人ソーシャルプロダクツ普及推進協会さんのホームページはこちら

<https://www.apsp.or.jp/socialproductsaward>

改めて、共に働くとは

NPO 法人 桑の木 金澤 恵利香

私にとって障害を持っている人達が遠くの存在であった頃、障害がある人達は給料の保証がないと思っていた。「障害者に一般社会と同等の給料を払いたい」という安易な考えで喫茶店を開店したのは13年程前のこと。障害者の就労支援など全くわからず、雇用して給料を払えばいいと思っていた。当時のジョブコーチや事業所の支援員に協力してもらったが結果は惨敗であった。何故だろう？理由は明確である。共に働く仲間という気持ちはなく、障害者に“施し”をしようとする偽善活動であったからである。

それまでは高齢者の介護サービス事業を運営していたが、NPO 法人を取得し障害者福祉サービス事業に方向転換することになり、共同連という団体を知ることになる。ここで初めて「共に生き、共に働く」という言葉を聞き、衝撃を受けた。

私の法人に限ったことであって欲しいが、多くの利用者と呼ばれる障害者は、支援員の下で働く小間使いである。

本来の主役である利用者はいつのまにか脇役を演じることになるのだ。

健全者として企業で働いていた人も障害を持ってしまったことで、支援員の下で指示を受ける存在となってしまう。

脇役になってしまった主役を元に戻すことは困難で、「障害のある人には出来ない」「障害者に任せて大丈夫ですか」という言葉を何度も聞いた。曇ったレンズを通して見てしまえば、何も出来ない人達なのだろうか？決してそんなことはないはずだ。法人を設立して12年。今年になってやっと、支援員も利用者も障害を持つ人だけの店を持つことができた。「障害者だけで大丈夫ですか」と質問をする職員がいる。申請時には「あくまでも支援をする側なので障害者の支援員は…」と役所に言われた。「共に生き、共に働く」ために、彼らも主役になれるのだと証明しなければならないのだ。

さて、労働者共同組合であるが、労働者共同組合は出資・経営・労働を担うとある。障害者や生活困窮者、また刑務所出所者に対して出資・経営・労働の平等が確保されるかどうかを私は危惧している。ここでの平等とはみな等しくすることを指しているのではなく、偏見から生まれる差別的な不平等と不適切な作業配置について指しているのである。志を同じにする仲間が集まったつもりでいても、潜在的偏見は人の心に存在している。先に述べた当事者だけの店は「十把一絡げ」にしか見えないかもしれないが、この「十把一絡げ」は課題に直面した時は全員で話し合い、解決策を見出し、店を運営している。経営と労働の平等があり、且つ、出来ない事を互いに助け合う相互扶助が存在している。彼らの行動を手本に私達は労働者共同組合のあり方について検討する必要があると考えている。

「10年の軌跡と私たちの提案」

NPO法人 奏海の杜 太齋 京子

東日本大震災では、まさに、命と生活に真正面から向き合わざるを得ない状況でした。荒廃した地域を目の当たりにして「何かしなくちゃ！」と立ち上がり、何かに突き動かされて走り続けた10年でした。復興の大波に翻弄され様々ありましたが、麦の会さん、飯嶋さんには常に温かくサポートをしていただき、大変心強く感謝しています。いつも本当にありがとうございます。

2011年3月11日に東日本大震災が発災し、団体としては、2011年6月からボランティア活動を開始しました。その活動の中で、2012年7月より当時地域になかった障害のある子の日中活動の支援を始めました。法人格をとったり制度事業を開始したり、障害児支援を続けられる土台を作りつつ、「より多くの人をサポートしたい」という思いが強かったので、2015年度、2016年度の2年間は、高齢者の福祉仮設の管理運営を受託し、不登校支援も手掛けたりと、活動を広げて行きました。でも、場所があっても利用児が増えない。支援者も集まらないというような、とても厳しい時期でした。ただ、子どもたちやご家族と誠実に向き合っていく中で、本人や地域に必要なことを実感していく、今思えばとても大切な時期だったとも思います。

2016年度末に南三陸町の仮設住宅の方々が全て復興公営住宅へ引っ越され、地域が、災害復興の緊急時から日常生活への段階へ移りつつありました。自分たちの活動についても、災害支援の活動だと終了にするのか、日常生活に寄り添って活動を継続するのか、大きな分かれ道でした。でも、子どもたちの無垢な笑顔を見ると、終わりにする気にはなれませんでした。

そこで活動を大きく縮小して、継続する道を探ることにしました。そのためにした改革は2つ。1つは奏海の杜のスタッフの「復興支援団体から地域資源へ」という意識の変換で、もう1つは奏海の杜と他者との関係について、「支援する人される人」という関係から、「共に地域に生きる人」という関係への変換でした。それを具体化したのが、子ども広場にこま〜るです。子どもたちと地域の方々の関わる姿を見ていて、知らないことが一番の障壁であり、人は、出会い関わることによりお互いを知り、学び合うことができると実感しています。そして、こんな関係を網の目のように広げることで、障害があってもなくても誰もが自分らしく暮らせる地域へつなげられるのではないかとこの夢を持つようになりました。

そこで、2021年6月、交ゆう館かなみを建設し開所しました。ここでは、「積極的に地域と関わる」とことと「障害者もともに学ぶ」ことを目的として、今までやってきた子ども広場にこま〜るを主軸に、大人支援の就労継続支援B型事業所かなみのもりを開所しています。

かなみのもりの活動で、物を介した地域との関わりをする中で、コッペさ

んにご協力をいただいたクッキーが大人気です。それは、コッペさんと地元登米町のお醤油屋さんのコラボをかなみのもりが楽しくプロデュースした、笑 YOU クッキー。他にも、登米市のカフェと農業法人が作った野菜パウダーのコラボケーキや、子ども広場にこま〜るの活動で練習した草木染めで作った手ぬぐい。そしてこの手ぬぐいで、町内の手芸サークルの方にあづま袋を作ってもらったりもして、自分たちだけで完結せず（自分たちだけで出来ないというのが大きいのですが）、様々な地域資源が交流する形で出来上がる商品を作っています。さらに、コロナで進んだオンラインの世界を利用して、物理的なハンデを克服できないか、とも挑戦中です。

他にもいろいろチャレンジしています。その一つが、公共交通機関を使って通所していただくことです。これは日常的に「地域と関わっていること」が災害時のご本人や家族の命と生活も守ると実感したことが始まりです。このあたりは車社会なので、活動しようとするすると常に「移動」の問題が出てきて、事業所は door to door の車送迎をしているところがほとんどです。それは便利で安心ですが、ご本人が地域とつながるチャンスを奪うと同時に、ご本人には「待ち」の姿勢を与えてしまっているのではないかと心配になりました。そこで、挑戦できる人には「自分の足で家から外へ出る」ということを習慣にしてもらえたら、気持ち的に地域が近くなるのではないかと考えたのです。4月からこの方法で通っている利用者さんは、もうすっかり慣れて JR の駅員さんとも仲良くなりました。この駅では、こうやって彼が日々の生活を通して、地域の方々の障害理解を進めているのだなと感じています。

交ゆう館では 12 月で宿泊棟の工事が終わり、2022 年 2 月からショートステイを再開する予定です。ショートステイの名前は「おとま〜る」。お泊まりから「おとま〜る」とつけました。どこかチカラが抜けている感じです。こんなユーモアは、奏海の障害者福祉のキーワードです。解決するのが難しいネガティブな状況は多いし、正面から対峙すると笑えない状況も多々あります。でもそれらも一周回って面白い（＝認めて興味を持って関わる）と、自然と活路が見えてきます。こんな愛情と尊重に裏打ちされたユーモアが、奏海の活動の根幹にあるようです。これからも「障害があってもなくても地域を奏でる人になる」を合言葉に、障害児・者との楽しい日常を提案し続けていきたいと思っています。

コッペと奏海の杜とのコラボ

笑 YOU クッキー

絶賛販売中！



今月の暖子さん

仕事・漢字を頑張っています。

日照時間	兼業農家	兼業農家	品種改良	耕地整理	化学肥料	無農薬米	暖流・寒流	黒潮・親潮	漁業制限	沿岸漁業	沖合・遠洋	保冷車	交通機関	自給率
日照時間	兼業農家	兼業農家	品種改良	耕地整理	化学肥料	無農薬米	暖流・寒流	黒潮・親潮	漁業制限	沿岸漁業	沖合・遠洋	保冷車	交通機関	自給率
日照時間	兼業農家	兼業農家	品種改良	耕地整理	化学肥料	無農薬米	暖流・寒流	黒潮・親潮	漁業制限	沿岸漁業	沖合・遠洋	保冷車	交通機関	自給率
日照時間	兼業農家	兼業農家	品種改良	耕地整理	化学肥料	無農薬米	寒流	親潮	漁業制限	沿岸漁業	遠洋	保冷車	交通機関	自給率

自己紹介

すがの ゆみ
① 菅野 優実

② 山形県山形市出身
仙台市泉区在住

③ 2月生まれ  30才。

④ 夫とうさぎと暮らしています 



↑友人に書いてもらった似顔絵です😊

はじめまして！

12月からコッペで働かせて頂いております、菅野(すがの)と申します。
これまで、ホテルのパン屋、コンビニ、スーパーの店員など主に接客業をしてきました。

夫は、一般の方から障がいのある方まで、さまざまな方に運動指導をする、
健康トレーナーという仕事をしています。

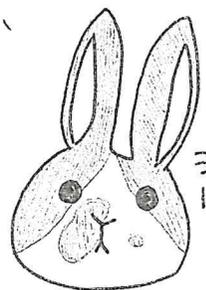
ミニレキスという種類の女の子のうさぎと3人(?)暮らしてます。

野球と音楽が好きで、音楽はゆずや女性アイドルの曲をよく聴いています。

野球は楽天イーグルスの試合を観戦しに行くのが毎年の楽しみです。

1日でも早くコッペの戦力になれるよう努めて参りますので、

宜しくお願い致します。



うさぎさん
1才10ヵ月

グループホームの新しい類型として、障害支援区分の軽い人に対して通過型のグループを新設する案が示されました。グループホームを終の住み家とするのではなく、訓練の場として位置づけ、一人暮らしをできるようにするといった内容のようです。希望する人に対してそのような仕組みを整えることは必要かもしれません。しかし、障害支援区分によってそのような対応がされるのであれば問題と思います。障害の「軽い」とされた人だって、気心の知れた仲間と一緒にグループホームで暮らし続けたいと思う人は当然います。逆に「重い」障害の人だって一人暮らしをしたいと思う人はいます。「重い」知的障害の人でもヘルパーさんと一緒に一人暮らしをしている人もいます。

国の制度は障害の程度・種類によって障害者を分け、それに対応したサービスを提供するやり方になっています。近年ますますその傾向が強くなっていると感じます。日中活動においても軽い人は就労移行やA型、中度の人はB型、重い人は生活介護や地域活動支援センターへと、なんの疑問もなく振り分けられています。学校の実習受け入れの際の評価表においても「どのサービスを利用するのが適当か」という評価欄がつけられるようになっています。

本来であれば当事者の希望に寄り添って、それならばAという制度があります、Bというサービスが受けられます、適当なサービスはないですが、できるように調整しますと考えていくべきでしょう。建前上はそのようにアセスメントされているはずですが、実態は制度ありきになっており、利用する当事者も事業者もそれにならされてしまっているのが現状ではないでしょうか。報酬改定においても成果主義が強調されています。それに伴ってますます当事者の希望を尊重するのではなく、サービスに「ふさわしい」障害者を受け入れる流れが強くなっています。

医療的ケアの必要がありながら、地域の支援学級に通学している方からの相談を受けています。同じ年代の子どもたちと一緒に場で成長したいと地域の学校を選んだのですが、通学・付き添いを母親がしています。現在4年生。子どもたちとは楽しく交流しているのですが、やはり通学は大変で、支援は受けられないでしょうかとの相談内容です。

教育委員会にも子供未来局にも障害福祉課にも連絡しましたが、制度がないとの返答で終わりです。今制度はないですが、方策を一緒になって考えてみましょうという姿勢ぐらいはあっていいでしょう。そのような子は支援学校が適当で、適当でない「場」を希望する人には対応しないということなのでしょう。現在は通学支援のボランティアを捜しながら、行政にも対応してくれるよう要望を出すことを検討しています。

制度の設計においては障害の種類・程度を考慮することは必要でしょう。しかし実際の運用でそれが優先されては困ります。私たちの思考も制度にしばられて当事者の意向を尊重できなくなるとは本末転倒です。

制度を守り事業を行うのはもちろんですが、かかわっている当事者の声を尊重しながら活動を行っていく、そのことを改めて確認したいと思います。

糸半

阿部 希

これから 本当の絆は大事な

あります。基本は甥っ子事 どうするが

今は考えている所です。ゆっくり

遊んでいると楽しくマイペースで

遊んでいきます。とても嬉しいです。

命かけてきちんとずっと

支えて本当にしっかり努力します。

御礼

一般社団法人 仙台建設業協会様より今年もまた寄付金をいただきました。もう何十年にわたり毎年寄付金をいただいています。

大切に役立てたいと思います。ありがとうございました。